

説小

「陳夫人」第二部

にあらわれた血の問題

小説「陳夫人」が第一部の後、どういふ展開をするか、若干興味をそゝる處であつた。第一部の後を受けて陳清文、安子の夫婦を中心とした陳家の生活の推移、發展、その間に描かれる本島人社會生活の景物、殊に一二の相當切實にして深刻な問題の提示を以つて、「陳夫人」は第二部で完結してゐる。

その後の陳家の生活には相當迂餘曲折があり、事業の不首尾、度重なる不幸、若き世代の煩悶等の試練を経て主人公女主人公は明澄なる境地に到達し、過去の難路をふりかへりつゝ新しい生活に踏み出す處で、筆をとゞめてをられる。此處で一二三の問題をひろい出したひと思ふ。

一

小説「陳夫人」のヒロインはやはり陳夫人安子である。彼女はストーリー全體をひきずつて行く程の人物でもなかつたが、併し彼女の點在は陳家の生活には決定的な意義があつた。異質的な陳夫人が介在しなかつたら、陳家はもつとく平凡な安易な日を送つたかも知れない。彼女のとび入りは確かに陳家を混亂させ、幾多の不幸を齎した。併し彼女のつゝましやかな献身によつて、幾多

陳
紹
馨



一題間の血たれわらあに部二第「人夫陳」

の波瀾を経た後、陳家は明澄な空氣の下に新なる安定を見出した。之は陳家の生活の質的な變化であり、一大飛躍であつたのである。

陳夫人は一人の平凡な女性にすぎなかつた。彼女は氣が弱く、寧ろ引込思案の方であつた。併し彼女には東洋的な女性のうるはしさが胸中に包藏されてゐる。始めて陳家に入つた時、彼女は異端視され、幾多意地悪い仕打に遭はなければならなかつた。併し之にめげず、彼女は常に温い心を以て之に處し、希望を以てつゝましやかな努力を續けて來た。そして誠はつひに徹つたのである。意地悪い弟嫁の玉廉もつひに彼女になびき、我利々々亡者の景文も彼女には何となしにおさへられる。だらしない瑞文も彼女の謂ふことに服し、陳明の狂躁な心は彼女によつて再び平和が齎された。彼女は弱い平凡な女性であつたが、春の陽光の如く陳家の人々を照し、之をあたゝめ、之を淨化して來たのである。

作中に描かれた女主人公安子には殊更の作爲的な處が感ぜられない。そして事實我等は臺灣に幾多の陳夫人が存してゐるのを見るのである。舊くは素朴な漁民に神として祀られる森川巡査の話、旗山郡杉林庄の藤倉造林地

にまつはる美談、或ひは地方の教員、警官、商人等にして土地の本島人に親の如く兄の如くしたはれた内地人は、決して少くなかつた。之等の人々は位階勳等を有するものでなく、又知名の士でもない。併し黙々として周圍に日本精神を植付けて行くその功績は絶大なものと謂はなければならない。大東亞共榮圈の建設に當つて固より上は果敢明敏なる指導者に待たなければならぬが、一方名の爲でなく利の爲でもなく、我を没して新附の民の中に入り込み、黙々として種子をまく無名の英雄の功績も、決して看過してはならない。否、道義的建設を旗印とする大東亞共榮圈なればこそ、民心の建設にいそしむ無名の英雄の功績は一層大きいものと謂はなければならぬ。

二

筆者は安子を平凡な女性と謂つた。殊更に衆目をひかないことにおいて確かに彼女は平凡な女性である。併し、仕末におへないあの陳家の氣風——そして殘念ながら陳家に見るが如き舊弊は本島人社會で往々見る處である——を明朗化した處から見て、彼女は斷じて平凡ではなか

つたのである。一見平凡なこの女性があれだけの非凡な仕事を完成したのはそもそも何によるものであらうか。

思ふに之は作者の所謂「よき意志」と尊い努力によるものであらう。他人をよく導いて行かうとするのは誰しも考へる處であるが、他人を感化し善導して行くことは決してなまやさしいものではない。そして中途半端な善導や施恩が所謂「恩を仇で返す」といふ悲劇になることは、世間によくある處である。

その昔アッシジの聖フランシスは小鳥に説教したとの

ことである。事實の眞偽は穿鑿しなくとも、深く自然に親んでゐる人が林の中の小鳥をも呼び集めることができるのは決して傳説ではない。禽獸といへども有情なものには心が相通ずることが出来る。いはんや人間ににおいておやである。剽悍食人の人種を感化した宣教師の話も決して架空ではない。あへて通事吳鳳の例を引く迄もなく、無智愚昧なる村民に神として祀られる森川巡査が我等にいかんなく事實を示してゐる。誠に情に向ふ刃なく、至誠は天に通するものである。無位無官、市井の一布衣といへども、刃をしりぞく情、天に通する至誠を以て終始努力すれば、殊更に作爲する處なくとも自ら周囲を化し

て行くものである。

もし陳夫人が暴に暴を以て迎へたとしたら、陳家は血なまぐさい巷に化したであらう。もし彼女が中途にして退却したとしたら、陳家の人々は恩を仇で返す人でないだ、といふ悲しい結果になつたであらう。併し彼女のたゆまない尊い努力が最後の勝利を齎した。こゝに偉大な教訓が存してゐるのである。

三

女主人公安子から主人公清文に眼を向けて見よう。さんぐく苦勞した清文は今やある境地に到達した。そしてその述懐は本島青年インテリにとつて三省すべき處である。少しながら引用しよう。

『私は臺灣の一知識人として、これまで物を考へたりて憮然たりして來たが、過去を振り返つて見て、いつたいどれだけの事をしたかと反省すると、たゞ不平を言ひ、徒らに物を要求したに過ぎない様な氣がする。これは私ひとりではなく、臺灣の人々があまりに幸福を追求しないへども、刃をしりぞく情、天に通する至誠を以て終始

きて來たのです。幸福の追求だけでは人間の墮落にすぎない。若し臺灣の人々が、人間を眞に生かす根本は幸福

一題問の血たれわらあに部二第「人夫陳」

でもなんでもなく義務にあるのだといふことを知つてゐたならば、多分もつと美しい高い精神が生れてゐたでせう。さうじふものが全く缺乏してゐた。それはたゞ求めるに急だからです。われくへはもつと興へることを考へねばなりません。共に事業を起さうとする青年に清文が吐露した心情も又聞くべき處である。

『もちろん、臺灣は今日大きな過渡期にある。傳統は玩具のやうに毀れはじめた。君達は混乱し惱んでゐるところだらう。しかし、僕の目からはさうはみえないのだ。傳統と歴史の崩解を防ぐだけの氣力もないし、かといつてそれを打ちこはして新しいものを建設する健康明朗な精神も不足だ。たゞ意氣地なくぶつへ不平を云つてゐるだけではないか。何かしようと思つても出來ない、仕様がない、さうじふ政治的制約のことを百萬遍くりかへしてゐても何も生れて來やしない。それより心を虚しくして一もちろん、これは云ふほど容易なことではないが一とにかく白紙になつて、やつて見ることだ。植民地的條件と制約にこだはつてゐる時ではない。われくへはもつと自分みづからを充實していかうと心がけなくちやいがん。われくへは、これまで物を貰ふことばかり考へて

來た。……いつもこせへと意氣地なく生きて來た。とことにまで苦しむところがない。それは興へることの困難、捧げることの苦痛を持たなかつたからだ。物質的にも精神的にももつと give and take の原則に立つんだ。われくへは一體今迄日本に何物を give したと思ふ。一千萬石の米、十五億萬斤の砂糖—そればこの臺灣の自然と土地が興へたものに過ぎないぢやないか。何かもつとじふるもの、もつと豊富なものをプラスしなくちやいかん。興へなくちやいかん。臺灣と臺灣人とはもうそこまで來てゐるのだ。』

安子の努力、清文の心構、共に問題の核心に肉迫したものと謂ふべきであらう。一方において安子の如き聖い努力があり、他方において清文の如き心構へを實踐にうつせば、今日の臺灣にまつはる宿命的な課題は自ら氷解するのではないかと思ふ。處が事實安子の努力も清文の實踐も、謂ふは易くして之を行ふのは並大抵でなく、そあるべきを信じてもその通り實行するのはとがく困難である。思ふに帝國の有機的な一環としての明朗臺灣を建設して行くことは、安子、清文雙方に課せられた神聖な義務でなければならない。この大事業は、双方の合作、

雙方の緊密な相互作用に待つて始めて可能である。安子、清文の如き境地に到達し難い庶衆も、常に安子、清文の心を心として努力しあげみ合つてこそ、聖業完遂への御奉公なのである。

四

清文と安子のひとり娘である清子の誕生祝に二人の内地人の學友が招かれた。座興に清子が奏したショパンの

ノスタルジアははしなくも二人の「灣生」の娘の鄉愁をか

りたてた。二人の友達は臺灣生れの憂鬱を感じてゐる。

併し自分はその灣生でさへもない。自分は内地人であり臺灣人だ。といふのはそのどちらでもないことではない。彼女たちは心にあるさとを持つてゐる。だが、自分は……自分の感じるのは妙に不安定なぎどちない、いくらか醜い……たとへば不協和音のやうなものではないか。

誠にいたはしい心情である。

半狂亂になつて臺北の高等學校から戻つて來た清文の甥陳明は、伯父に次の如く謂つた。

『或るやつが嗤ひながら僕に訊いたことがありました。

もし日本と支那が戰争したら、お前はどうちにつく。伯父さんはそのときの僕の受けた侮蔑がどんなだつたか想像出来るでせう。與へられたものはこのやうなものなんです。嵩高な美しい特權を持たないから、命の危険を知らないから、あらゆる知識や倫理が究極の生命に達し得

ない、さういふ位置をどんなにさびしく思つてゐるか分らない僕に對して……。戰場に出て鬪ひ且つ死んでいく……あれがないから……』

この惱みも又深刻なものと謂はなければならない。そして之は今日の臺灣の若き世代に少くない深刻な惱みである。だが、惱みは深刻なほど尊い。このやうな惱みさへおこらない様では、臺灣は救はれない。惱みを惱み抜いた後に、清新純潔なものが生れて來るのである。

ひとり娘清子をどういふ人にめあはすべきか、安子の心は迷ひに迷つてゐる。四圍の情勢から謂へば、臺灣人にめあはすのが最も自然である。併しそうした場合、自分自身の日本の血がいちだんと稀薄なものとなり、やがて消え去つてしまふのだと思ふと、ふしきな淋しさを感じる。出來れば清子には内地人の婿をもらつてやりたい。そして之が「抗し切れない血の命令」だつたのであ

る。陳家に嫁して二十年、萬事落着した今になつても、解消し得ないこの悩みに安子は苦しんでゐるのである。

血の祕密。血の叫び。我等はナチスドイツの喧々囂々たる「血」の問題を思ひ浮べる。だが併し、はたして「血」は越えられない宿命的な障壁であらうか。

五

チャールス・ダーヴィンは典型的なイギリス人の一人

と謂はれてゐる。處がその家系を探索したカール・ピア

ーソンによれば、彼の血統にはアイルランドの小王、スコットランド及びピックトの王、マン島人、アルフレッド

大帝、シャーレマン大帝(カルロ家)、ドイツのサクソンニア家、フレデリック一世(ホーヨンシュタウフェン家)、ノルマン人、バヴァリア、サクソンニア、フランダーの貴族、サヴォイ公、イタリー王、フランク族、アレマン族、ブルグンド族、ロンゴバルト族、ヘンガリーの民族の王、コンスタンチンノープルのギリシャ王、ロシヤ

の皇帝イヴァン四世等の血がまぢつてゐることである。歐洲の民族移動當時の諸民族にしてダーヴィン家の血にまぢらないものは殆んどなかつた。ダーヴィン家の

一例に照しても、所謂民族又は種族なるものが、生物學上純粹な種族、純血な種族でないことが明かである。

ひるがへつて我國を見るに、傳へる處によれば奈良朝時代大和の六十餘の民の内半數以上が支那及び朝鮮からの歸化民だつたのである。併し所謂「血」を異にするそれらの民は一つの埠場の中で完全な日本人にとけ込み、かつては朝鮮において、今は支那大陸において聖戰にいそしんでゐるのである。

血か地か (Race or place ?) 生れか育ちか (nature or nurture ?) 遺傳か環境か (Heredity or Environment ?) のスローガンをめぐつて遺傳學者、人種學者、社會學者が互に論難し、問題は今日と雖も解決された譯ではない。だが確實に我等が言ひ得ることは、史上の人種の交錯の事實によつて、所謂民族や種族に生物學上純粹なもの、純血なものが極めて稀であることである。謂ふ處の「血」は生物學的な概念よりも寧ろより多く文化的歴史的な概念である。所謂血の相違は、多くの場合異つた運命共同體における文化的歴史的形象の相異を端的に象徴的に表現したものに他ならない。「血の祕密」は決して冷然たる生物學的な宿命的な世界ではなく、温かく、文化的歴史的

な、努力と創造の世界でなければならない。同一共同體に運命を共にするものであれば、かつての大和の六十餘の民の如き運命にあるものならば、從來の狭い血の障壁は自ら消失し、そして後により廣大な象徴的な「血の支配」が現はれるのである。問題は如何に大きな運命共同體に完全にとけ込むかにある。ひと度これが實現されば、そしてこれが實現された時においてのみ、清子のノスター・ルヂアも、陳明の心の彷徨も、安子を苦めるかなしい血の命令も、完全に消散するのである。

六

一讀した後「陳夫人」の第二部は第一部の様なピックチュアレスクな處がないだけ、しつくりした感じがする。作者が相當深刻な問題にメスを加へたことは、上來ふれた處で既に明かであらう。この深刻な問題もめぐつて作中の人物の心理、殊にその魂の發展の描寫に相當妙を得てゐる様に思はれる。陳明が感嘆した「アンナ・カレーニナ」の中のレヴィンの精神的發展に恐らく作者も心を引かれたであらう。制作には色々の行き方がある様である。大地の一片としての人間を描いて行くものもある

ば、寧ろ心の動きやヒュマニティーの歴史を描いて行くものもある。「陳夫人」の作者は後者に屬するものでなく、民の如き運命にあるものならば、從來の狭い血の障壁は自ら消失し、そして後により廣大な象徴的な「血の支配」が現はれるのである。問題は如何に大きな運命共同體に完全にとけ込むかにある。ひと度これが實現されば、そしてこれが實現された時においてのみ、清子のノスター・ルヂアも、陳明の心の彷徨も、安子を苦めるかなしい血の命令も、完全に消散するのである。

作者は廣く臺灣の生活を描いてゐる。誕生祝、命名、満月、ビール瓶や硝子の破片を漆喰でくつゝけた屏、同姓不婚、註生娘々、圓仔花、紅頭司、祖廟、紅龜粿、穿山甲、魚塭、土公、はてはアメーバ赤痢から流行性腦脊髓膜炎に至るまで、臺灣の景物が描かれてゐる。だが、有機的な臺灣の生活の一片が浮び上つてゐない様に思はれる。體臭鼻をうつ様な臺灣の一片ではないやうだ。

作者は第二部の主要題材の一つとして鳳梨產業を取り入れてゐる。そして相當研究し勉強したことは、例へば鳳梨適地の土質、交配種の育成、新式機械、製造工程から勞銀に至るまでの蘊蓄を編中にちらつかせてゐることでも明かである。併し鳳梨產業はやはり「陳夫人」の中では生きてゐない。鳳梨を作る百姓が知らない様なことを作者は澤山知つてゐるが、鳳梨を作る百姓なら誰も知つてゐることを作者が間違へてゐる處からしても、我等にのぞかしてゐるのは山野に在る鳳梨農場ではなくして寧ろ何處かの實驗室又は標本室の様な感じがする。八月のあ

る日農場へ職員の見舞に行つた清文夫婦が、鳳梨が少し過熟になつたことを話し合つてゐた。元來鳳梨は短い出盛期に一時にどつと出廻るものであり、その採收、製造並びにそれに伴ふ労力をめぐつて、採收期は鳳梨産業でも重要なポイントである。而して出盛期は天候によつて遅速はあるが、高雄州下では例年六月末から七月の半ば頃迄であり、臺南州はそれより幾分おくれるのみにすぎない。八月に入つて鳳梨が少し過熟になつたといつては、折角の丹念な調査も生きて來ないのである。清文の新式な鳳梨罐詰製造工場は「農場の方との釣合ひも充分考慮」するといふ方針で進められたもので、一日に六十噸の原料を消費する能力があると謂ふ。自營農場の原料が出来る迄、工場は原料を他に求めたのであるが、三年後には自營農場から出來たパインナップルを自營工場の機械へ持つて來ることになつた。處で鳳梨烟といふのは、農場内の六甲歩と河向ふの十五甲歩、計二十一甲歩である。臺灣南部の鳳梨烟は、平年作では一甲當年平均八千顆の收穫がある。一顆當の平均重量は大體一斤六十匁である。今一顆當平均を一斤半としても甲當八千顆で一萬二千斤、之を米噸に換算すれば八噸にすぎない。一甲歩よ

り一年に八噸產出すれば二十一甲歩で年に百六十八噸の鳳梨が出る。之を能力六十噸の工場にかければ三日足らずですつきりかたづいてしまふのであるから、工場と農場とをにらみ合はしたと謂ふのも全然意味がない。

「陳夫人」は鳳梨産業に關する論文でなく一編の小説であるから、鳳梨のことを殊更に穿鑿すべきではない。只筆者のいひたいのは、作者が色々臺灣の景物を描いてゐるが臺灣の景物が生きて讀者に肉迫してゐないこと、作者の天分は寧ろ心の動き、ヒューマニティーの歴史の描寫において豊かであることである。その得意とする點において作者は深刻な問題を我等になげつけてゐる。我等はそれを強くひきつけられたのであるが、併しやはりある種の物足りなさを感じなくもない。「陳夫人」は謂はゞ「臺灣を題材にした」文學であり、「臺灣に關する」文學である。我等は併し「臺灣から生まれた」文學が欲しい。臺灣に住むものから生まれ、臺灣の雰圍氣を以て我等に肉迫し、そして臺灣に住むものゝ魂をゆすぶる様な文學、それを我等は希求するのである。

何はさておき、「陳夫人」における庄司氏の努力を我等は多としなければならない。